



代掻きの様子／農作業が家畜から機械に代わる様子がよく分かる一枚／昭和32年5月・目吹／写真提供＝鎌形寿夫さん

■稲作は約2千年前から

野田で農業がいつから行われてきたかは定かではありませんが、出土した遺跡などから推察すると約2千年前には稲作が行われていたと考えられています。

「千葉県野菜園芸発達史」（千葉県・昭和60年）によれば、野田を含む東葛飾地域の野菜は、享保年間（1716～1736）に江戸に向けての生産が急増し、明治時代には野菜の種類が多くなり、同種類のものでも新しい品種が導入され、栽培方法の工夫で出荷時期が広がるなど、産地化も進みました。

実際に野田では、明治時代には、白菜やさといも、大正時代にはナスやつけな、こまつなの主産地となっていました。

また、「千葉県東葛飾郡七福村岩名古代ヨリ口碑町村詩二関スル概略調」（野田市所蔵）には、岩名産

の桃について、宝暦11（1761）年ごろから江戸へ出荷し、近郊の村でも早稲の品種の生産が増えたことで、大正7（1918）年ごろには出荷を終えたことが書かれています。

さらに、文政9（1826）年の「農業要集」（宮負定雄著）には「つくねいもは関宿が名産地」という記載もあります。

■土地改良事業で収量をアップへ

野田市の中央部の台地には畑作地帯が、周辺部の江戸川・利根川沿いには水田地帯が広がっています。

高台の畑地は、保水性の低い土壌のため、干害や風害が発生しやすく、水田地帯では、冠水することもあることから、戦前から、揚水機や排水機の設置や水路整備などが進められ、戦後は土地改良事業や農業基盤整備事業へと発展

歴史の
風景
ある

人と農業との かかわり